

# ここまでわかった<sup>たちばなかんがいせきぐん</sup>橘樹官衙遺跡群～新たな発見と史跡整備～

栗田 一生（川崎市教育委員会）

## 1. はじめに

橘樹官衙遺跡群は、神奈川県川崎市のほぼ中央部に位置する高津区千年・北野川、宮前区野川本町3丁目に所在し、東は多摩川とその沖積低地を見下ろし、西は霊峰富士を仰ぎ見る、標高40～42mの多摩丘陵上に立地しています。本遺跡群は、古代武蔵国に所在した21郡の1つである橘樹郡ちとせいせやまだいに置かれた役所跡が発見されている千年伊勢山台遺跡〔橘樹郡家跡〕くわうけ（※）とその西側に隣接して造営された古代寺院跡が発見されている影向寺遺跡ようこうじから構成されています。

橘樹郡家跡については、1996（平成8）年に宅地造成に伴う発掘調査で東西に整然と並ぶ倉庫群が確認され、初めてその存在が明らかになりました。その後、川崎市教育委員会（以下「市教委」という。）が1998～2003（平成10～15）年度に実施した橘樹郡衙推定地確認調査事業、2013（平成25）年度から現在まで継続している橘樹官衙遺跡群確認調査事業などにより、郡家の主要施設である正倉院が明らかになるとともに、館・厨家たくりやも概ね特定されるなど、その内容が少しずつ明らかになってきました。一方、影向寺遺跡の古



第1図 川崎市と史跡橘樹官衙遺跡群の位置

※千年伊勢山台遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡ですが、その中の古代官衙に関連する遺跡について「橘樹郡家跡」と呼称しています。以後、古代に係る場合は橘樹郡家跡を用いています。

代寺院跡（以下「古代影向寺」という。）は、古くから古瓦の散布地として知られ、かつ現在も同じ場所で法灯を伝える影向寺に伝わる縁起に天平年間の創建と記されていることなどから、奈良時代の創建であろうと推定されていましたが、昭和52～55（1977～1980）年度に市教委が実施した影向寺文化財総合調査の中で実施した確認調査で出土した瓦などの年代から、寺院の創建が7世紀後半の飛鳥時代後半まで遡ることが明らかになりました（市教委1982）。

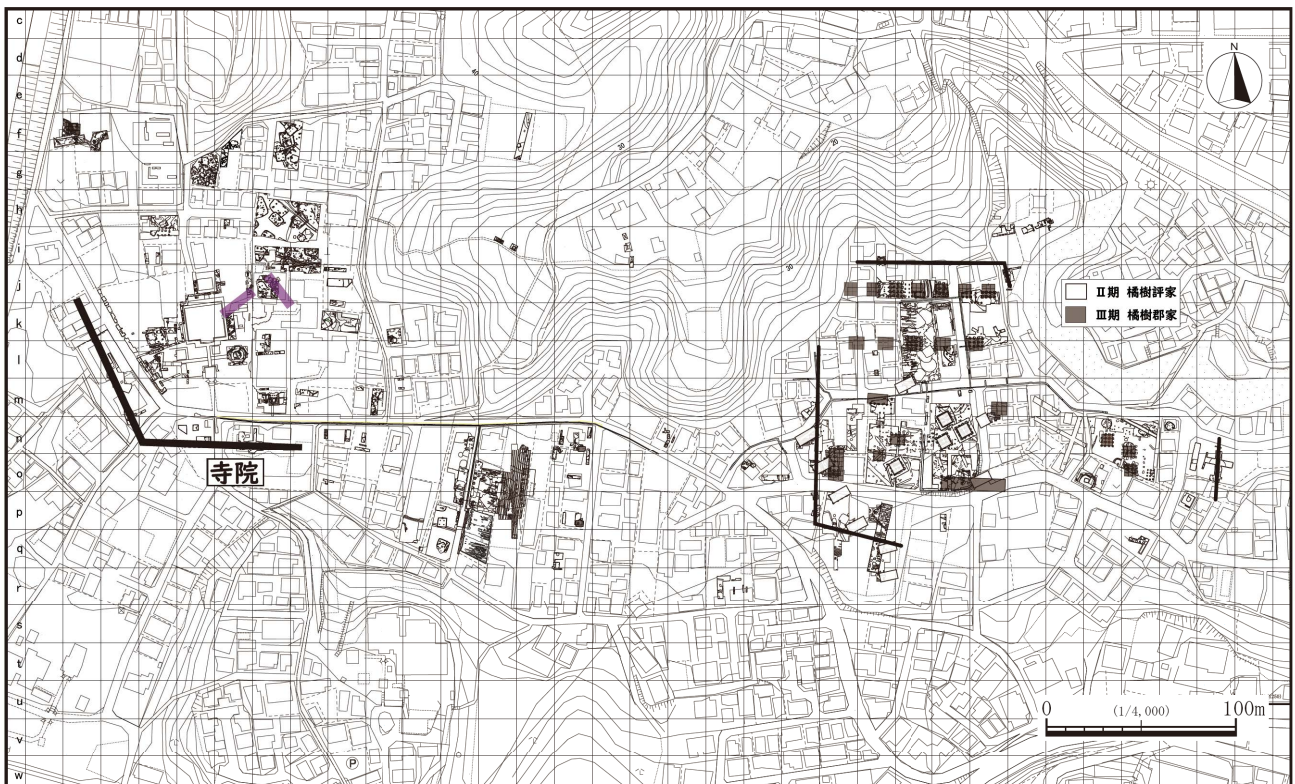
両遺跡は、多くの調査により、その歴史的価値が明らかになったことから、「我が国の歴史を明らかにする上で重要な遺跡である」と評価され、2015（平成27）年3月10日、史跡橋樹官衙遺跡群として川崎市初の国史跡に指定されました。

## 2. 橋樹郡家跡における調査成果

### (1) 東西に並ぶ郡家と寺院（第2図）

平成8（1996）年度から現在までの発掘調査の結果、橋樹官衙遺跡群では、西から東へと伸びる丘陵平坦面を上手く利用しながら、郡家諸施設と寺院が東西約600mの範囲に並んで設置されていることが分かってきました。

この場所に郡家諸施設や寺院が設置された最大の理由は、この地域が古墳時代から各地域を結んでいた主要道路の合流地点で、東京湾へとつながる河川も隣接する、水陸交通の要衝であったためと考えられます。現在の東京都側からやって来た人々は、多摩川を渡るだいぶん前から、遠く西の丘陵上に橋樹郡家正倉院に建ち並ぶ倉庫の巨大な屋根を見ることができ、逆に現在の横浜市からやって来た人々は、遠くから北の丘陵上にそびえる寺院の三重塔などの堂宇の屋根が見えたと思われされます。このように、古代橋樹郡の力を人々に知らしめるには、うってつけの場所であったといえます。



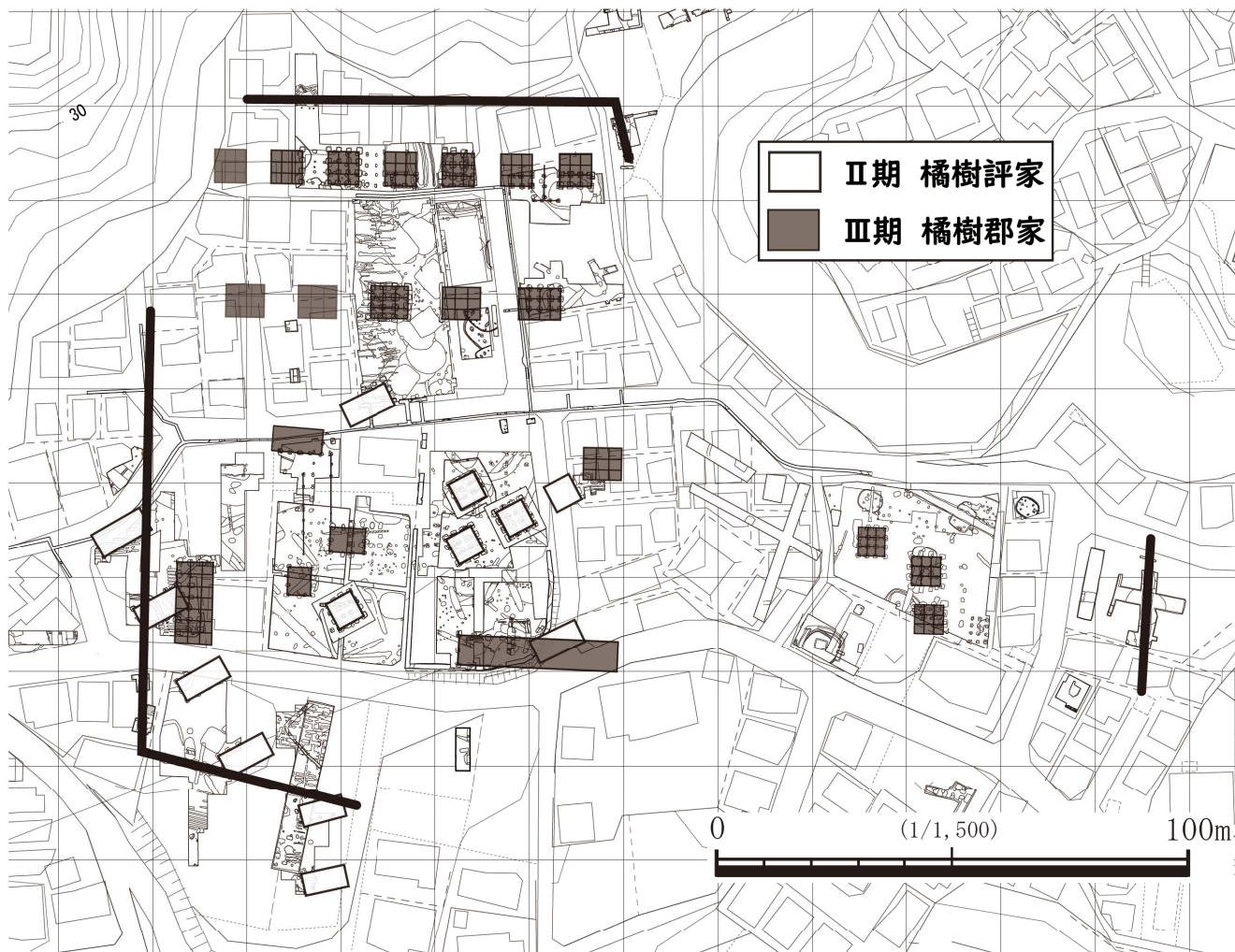
第2図 橋樹官衙遺跡群施設配置推定図



郡家の主要施設としては、前述したように、郡の政務全般を行う郡庁、税である稲などを保管する正倉、郡家で働く役人に食事などを提供する厨家、国内の視察で来た国司などが宿泊する館が存在したことが知られています。これまでの調査で、最も整備された8世紀代には、西から寺院、館、厨家、郡庁、正倉院が配置されたと推定しています。正倉院は最初に発見された遺構が倉庫である正倉であったため、その構造などはかなり明らかになってきました。それ以外の主要施設では、近年の調査で、厨家や館と考えられる建物が発見されています。しかし、郡家で郡司が政務を行う郡庁だけは、いまだ発見されていません。ただし、橘樹官衙遺跡群は、東西に延びる丘陵平坦面の限られたスペースを有効に利用して、官衙施設を造営したことが明らかになっていること、また郡家の主要施設は一定範囲にまとまって造営されていることが各地の調査成果から分かってきているので、確認されている正倉院地区と館・厨家地区との間、これまでほとんど調査が行われていない、東西約120m、南北約80m程の場所に、郡庁が存在する可能性が高いと考えられます。今後、調査を実施するチャンスを待ちたいと思います。

## (2) 橘樹郡家正倉院の変遷と構造 (第3図)

橘樹郡家跡の正倉院は、発見した遺構の切合い(重なり)や建物主軸方位の違い等から、Ⅰ期(7世紀第3四半期頃)、Ⅱ期(7世紀第4四半期頃)、Ⅲ期(8世紀代)、Ⅳ期(9



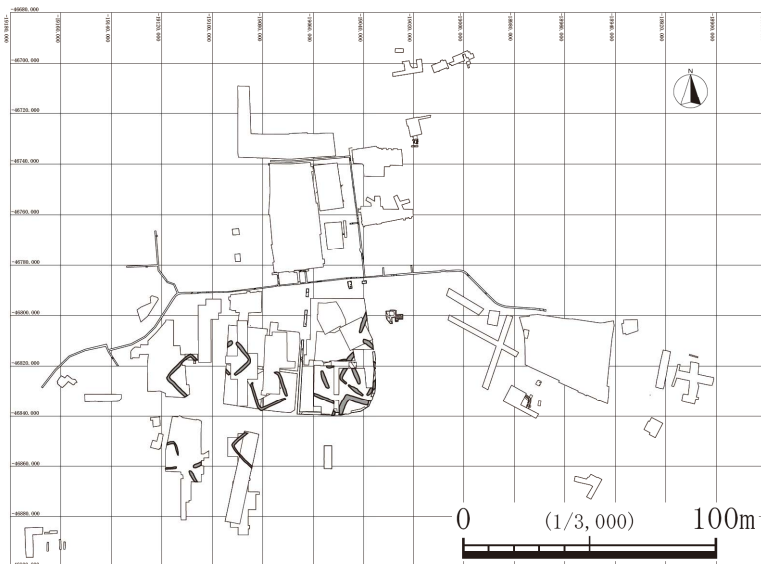
第3図 橘樹郡家正倉院地区における遺構変遷図

世紀前半)、V期(9世紀後半～10世紀初頭)という5期の変遷があったと考えられています。そのうち、I・II期は橘樹評の時期、III～V期が橘樹郡の時期で、特にIII・IV期は郡家正倉院が維持されていた時期といえます。

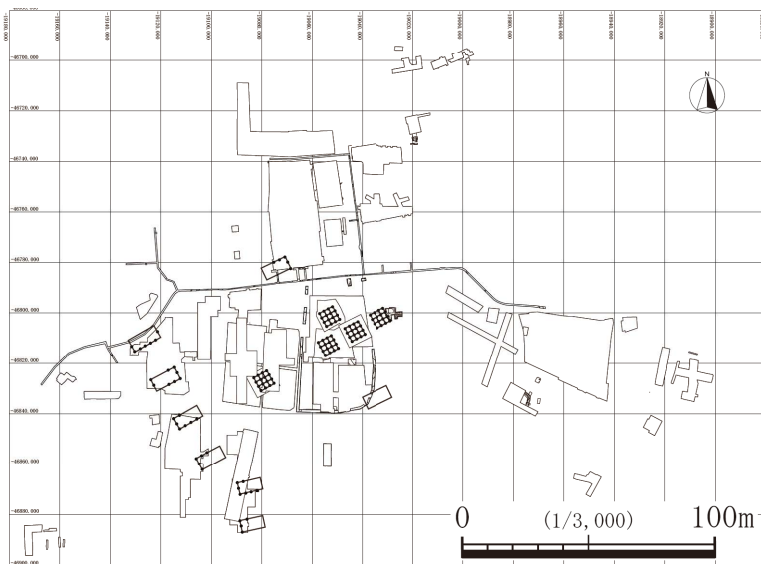
I期は7世紀第3四半期頃と考えられ、四方ないし三方に溝が巡る遺構が多数発見されていますが、これらの遺構から柱穴などが発見されておらず、遺構の性格が不明であることから、現状は不明遺構と呼称しています。ただし、確認された遺構の特徴などから、北九州から近畿地方にかけて発見されることが多い、朝鮮半島に起源をもつ大壁建物おおかべに類似しているという指摘もあり、今後さらに検討が必要です。

II期は7世紀第4四半期頃と考えられ、I期と様相が一変し、溝が四方または三方に巡る遺構は見られなくなり、建物主軸方位が真北から30度ほど西に傾いた建物群が建てられます。これは、建物主軸方位が概ね北となるIII期の建物群とは大きく異なっていますが、III期の建物群と同様、建物が規則的に配置されていることから、官衙的性格が強い建物群であると想定されます。現状では、大宝律令で「橘樹郡」となる以前、7世紀後半の「橘樹評」と呼ばれた時期の建物群であると考えられます。

III期は8世紀前半～後半と考えられ、郡家正倉院が最も整備された時期です。これまでの調査で、東西南北を幅2～3mの溝で囲まれていたことが確認されています。II期の建物群は建物主軸方位が西に傾いていましたが、この時期はほぼ真北の主軸方位をとるようになります。そして、総柱の高床倉庫を含む多くの建物は、東西南北を溝で囲まれ(正倉院外周区画溝)、正倉院を形成していました。周囲の溝が全て連続していたかどうかは不明ですが、その規模は、外周区画溝の中心間が東西約213m(710尺)、外周西側区画溝部分が南北約135m(450尺)という広大な領域であったことがわかっています。また、この規模が、この時代の長さの単位である唐尺(約29.7cm)に換算すると概ね



第4図 橘樹郡家跡正倉院地区I期(7世紀第3四半期頃)の遺構群



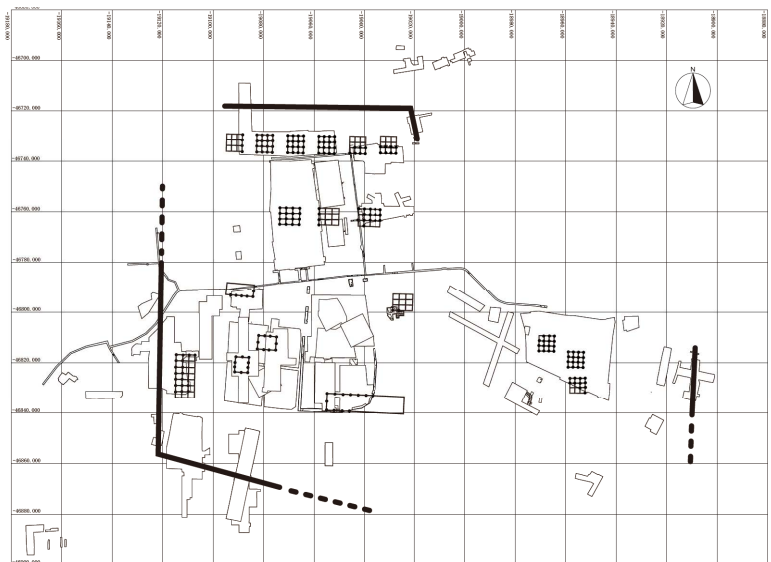
第5図 橘樹郡家跡正倉院地区II期(7世紀第4四半期頃)の遺構群



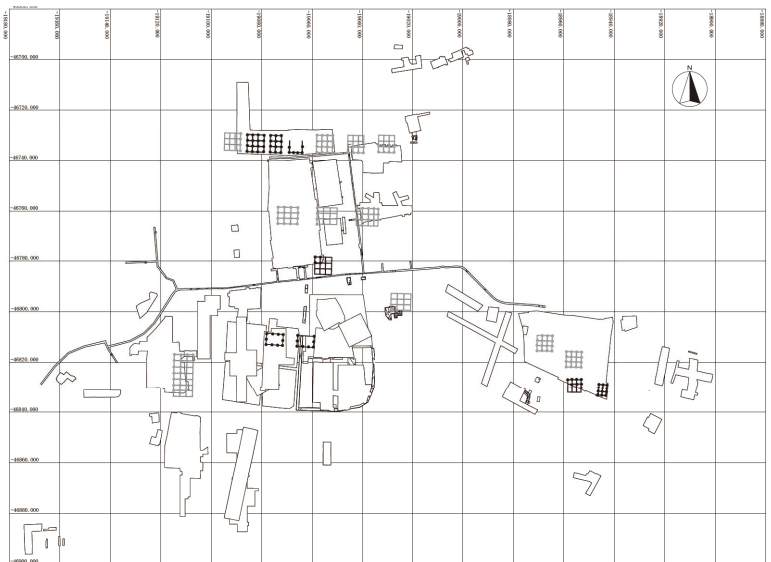
710尺と450尺と区切りのよい数値になることから、事前に施設の規模などの設計を行った上で、造営を行った可能性が高いと考えられます。

IV期は9世紀前半～中頃と考えられ、III期に造営された正倉院の一部が当初存続していた可能性もありますが、III期のような大型の正倉院等は造営されなくなり、正倉院が衰退し、終焉を迎える時期です。また、正倉院の外周区画溝もIII期の終わり頃までには中層まで埋没していた可能性が高く、IV期には溝が埋まり、失われていたものと推測されています。

V期は9世紀後半～10世紀初頭と考えられ、最終的に正倉院全ての機能を失い、消滅した時期です。この時期のどの辺りまで、郡家の正倉院としての機能や意識が残っていたのかは不明ですが、これまでの発掘調査からは、正倉院内でこの時期の掘立柱建物や溝状遺構は確認されていません。ただし、正倉院地区の西側、古代寺院跡である影向寺遺跡に近い橋樹郡家跡<sup>かみはらしゆく</sup>上原宿地区では、この時期の館の施設と推定される大型掘立柱建物が確認されており、橋樹郡家はまだ維持されていた可能性が高いと考えられることから、橋樹郡家の正倉院のみがこの時期で消滅したのか、または別の場所に移ったため建物が見られないのかは、今後の課題といえます。



第6図 橋樹郡家跡正倉院地区Ⅲ期（8世紀代）の遺構群



第7図 橋樹郡家跡正倉院地区Ⅲ期（9世紀前半）の遺構群

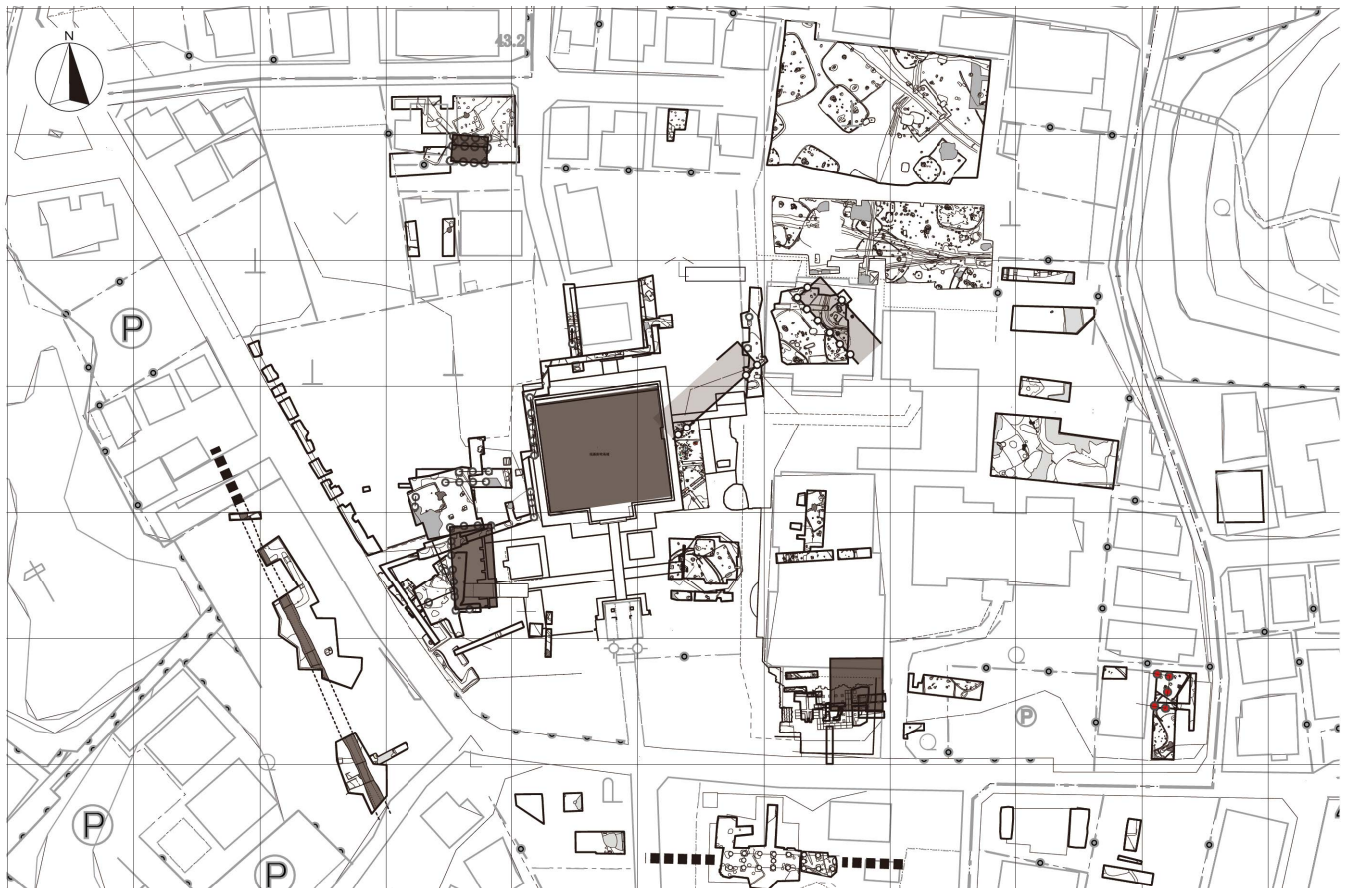
### 3. 影向寺遺跡における古代寺院関連調査成果

#### (1) 古代寺院の伽藍配置（第8図）

2(1)でお話したように、橋樹官衙遺跡群は、古代寺院、郡家の館、厨家、郡庁、正倉院が東西横並びに配置されていたことが明らかになってきました。最も西側に配置されたのが、影向寺遺跡で確認されている古代寺院です。現在も同じ場所で古代からの法灯を伝える影向寺が所在しています。影向寺の南東側には南から北へと谷が入り込んでいますが、古代においては、その谷を通してこの地域の古代における主要道路の1つであった中原街道から古代寺院の金堂や塔の<sup>いらか</sup>麓がよく見えたと推定されます。

古代寺院の主要施設としては、前述した影向寺文化財総合調査で確認されている、影向寺の本堂である薬師堂基壇下の金堂跡と薬師堂南東側に所在する影向石東側の塔跡があります。また、平成25年度から実施している橘樹官衙遺跡群確認調査事業において薬師堂南西側で確認した、南北6間、東西3間の掘立柱建物跡も主要施設の1つであると考えています。この3棟の主要施設は、金堂跡と塔跡が総瓦葺き、掘立柱建物は板葺きであったと推定していますが、この掘立柱建物がどのような役割をもった施設であったかは不明です。建物以外の主要施設としては、幅2～3mの直線状に伸びる溝が発見されており、古代寺院の寺域を画した区画溝である可能性が高いです。

この3棟の主要伽藍以外にも、薬師堂北西側で一面廂や総柱の掘立柱建物跡や竪穴建物等が発見されていますが、古代寺院の伽藍配置や施設の内容等は、まだ十分に明らかになっていない状況といえます。



第8図 影向寺遺跡で確認された古代の建物・施設 (S = 1 / 1200)

## (2) 古代寺院の変遷と構造

影向寺遺跡で確認されている古代寺院は、市教委が作成した総括報告書（川崎市教育委員会2014）において、これまで発見した遺構の切合い（重なり）や出土した瓦の年代・特徴等から、1期（7世紀中葉～後葉）、2期（7世紀後葉～8世紀初頭）、3期（8世紀前葉）、4期（8世紀中葉）、5期（8世紀後葉）、6期（9世紀前葉～中葉）、7期（9世紀後葉～10世紀初頭）という7期の変遷を想定しています。

そのうち2期以降が古代寺院が存続した時期と考えられていますが、発掘調査の成果からは、2期にすべての伽藍が揃った訳ではなく、徐々に伽藍整備が進んだ可能性が高いこ



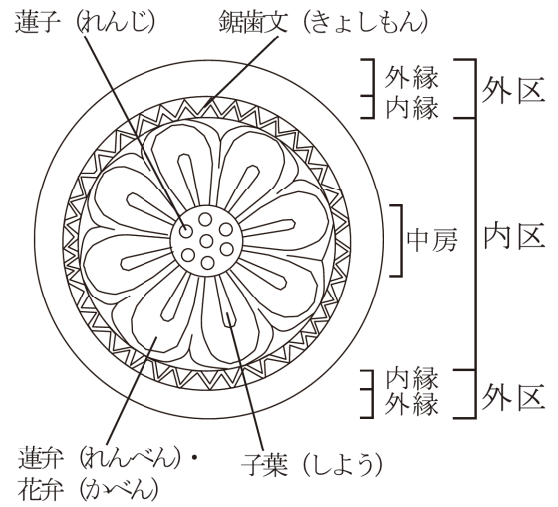
とがわかっています。ただし、現在のところ、創建に際し金堂が造営されたことは確実と思われていますが、それ以外の堂宇については、いつ造営されたのか分かっていません。

### (3) 古代寺院に葺かれた瓦 (第10・11図)

影向寺遺跡からは、古代寺院に葺かれたと考えられる瓦が大量に出土しています。その量はこれまでの調査等で発見した量は、約1万点、約1トンとなります。

古代寺院に葺かれた瓦は様々な種類がありますが、影向寺遺跡からは、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦が見つかっています。そのうち、寺院の時期等を明らかにする上で重要となるのが、文様がある軒丸瓦です。影向寺遺跡で確認されている古代寺院では、現在までに7種類の軒丸瓦が確認されていますが、その特徴から大きく3つのグループに分けることができます。

1つ目のグループ(第1型式)は、山田寺式の影響が見られる軒丸瓦で、外区をもち、内区には八葉の花弁と子葉、小さ目の中房に1+6個の蓮子を入れた、八葉単弁蓮華文です。同じグループですが、外区内縁が無文で、花弁・子葉が比較的肉厚となる1A型式、外区内縁が線鋸歯文で、花弁・子葉が比較的肉厚となる1B-1型式、平坦となる1B-2型式の3つの型式に分けることができます。発掘調査では新旧関係を明らかにできていません



第9図 軒丸瓦の部位名称



八葉単弁蓮華文 (外区内縁無文)

八葉単弁蓮華文 (蓮弁肉厚・外区内縁に線鋸歯文)

八葉単弁蓮華文 (蓮弁平坦・外区内縁に線鋸歯文)

第10図 影向寺遺跡で確認された古代の軒丸瓦 (1A型式、1B-1型式、1B-2型式)

が、文様の特徴から、1A 型式⇒ 1B-1 型式⇒ 1B-2 型式という変遷があるのではないかと推測しています。この変遷が、創建時に建設された金堂における補修を表すものか、金堂建設後に塔を造営したことを表すものなのか、現状ではまだ分かっていません。

2つ目のグループ（第2型式）は、武蔵国分寺創建期の瓦に類似した軒丸瓦です。周縁が間弁部かんべんぶと連なる特徴をもち、八葉の花弁、中房に1 + 4 + 8個の蓮子を入れた、八葉単弁蓮華文である2A型式と2A型式よりも一回り大きい2B型式、2A型式とほぼ同じ八葉単弁蓮華文であるが、外区をもち、内縁の一部に線鋸歯状の文様がある2C型式の3つのタイプがあります。こちらのグループの新旧関係については、よく分かっていませんが、2A・2B型式は同じ文様で大きさが異なることから、葺かれた建物の違いを表している可能性が考えられます。



八葉単弁蓮華文

八葉単弁蓮華文

八葉単弁蓮華文（外区あり、外区内縁の一部に線鋸歯状の文様あり）

第 11 図 影向寺遺跡で確認された古代の軒丸瓦（3A 型式、3B 型式、3C 型式）

3つ目のグループは、これまでに1点しか発見されていませんが、影向寺遺跡の古代寺院を考える上で非常に重要な瓦といえます。発見されている瓦は全体が残っていませんが、同じ範型はんがたで製作された瓦から、六葉の花弁ろくようで、中房に1個の蓮子をもつ軒丸瓦と考えられ、埼玉県入間市に所在する東金子窯跡群かまあとの中の1つである「新久窯跡」あらくで製作された瓦と判明しています。六国史の1つである『続日本後記』によれば、承和2（835）年に落雷により焼失した武蔵国分寺の七重塔を、10年後に武蔵国男衾郡おぶすまぐんの前の郡司である壬生吉士福正みぶのきしふくしょうが私費で再建したいと願い出て許されたとの記録があることから、この瓦は、9世紀中頃に、七重塔再建のために新久窯で製作されたものと考えられています。



## (4) 古代寺院の変遷

影向寺遺跡で確認されている古代寺院の変遷は、平成26(2014)年に市教委が刊行した総括報告書によります。総括報告書では、1期が古代寺院の造営前(7世紀第3四半期～第4四半期頃:橋樹評段階)、2期が金堂が造営された古代寺院創建期(7世紀第4四半期～8世紀初頭)、3期が8世紀前葉、4期が金堂の改築と塔の造営が行われた古代寺院再整備期(8世紀中葉)、5期が補修期1(8世紀後葉)、6期が9世紀前葉～中葉、7期が補修期2(9世紀後葉～10世紀初頭)であるとしました。

しかし、発掘調査による新たな発見や出土資料の再確認などにより、従来の変遷を見直す必要が出てきました。現在、新たな変遷について検討を行っているところであり、最終的には若干変更があるかもしれませんが、現状で私が考えている変遷について、従来の変遷案に変更が必要と考えている部分を中心に、説明したいと思います。

### ① 1期 [7世紀中葉～後葉]

1期は、従来の変遷案と概ね変更はありませんが、確認している建物は、橋樹評家に関連する橋樹郡家正倉院地区Ⅱ期の建物群と同じく、建物主軸方位が真北から西に傾く特徴があることから、1期の建物も橋樹評家に関連する施設であると想定されます。

### ② 2期 [7世紀後葉～8世紀初頭]

2期は、従来の変遷案と変更はありません。発見された平瓦に「むざしこくえばらこおり无射志国荏原評」銘文字瓦があり、この「国評」の表記方法からは、概ね天武12(683)年から文武天皇4(700)年までの間に製作された瓦と考えられることから、創建時の瓦葺建物はこの時期に造営が始まった可能性が高いといえます。

### ③ 3期 [8世紀前葉]

3期は、ほとんどわかっていない時期ですが、2期で製作された軒丸瓦第1型式にくつつかのタイプがあることから、当該期に金堂の補修が行われた可能性があります。

### ④ 4期 [8世紀中葉]

4期は、従来、薬師堂南東側に塔心礎である影向石が所在し、その周囲に版築を伴う掘込地業が確認されていることから、当該期にこの場所で塔が造営されたと考えられてきましたが、近年の調査で、版築内から9世紀中葉頃の武蔵国分寺七重塔再建に新久窯産の軒丸瓦が出土したため、当該期にこの場所で塔の造営はなかったことが明らかになりました。現在のところ、当該期に確認されている軒丸瓦第2型式が葺かれた建物は何かという点については、(ア)金堂の改築時、(イ)別の瓦葺建物建設時、という2つの案が考えられますが、7世紀後葉～8世紀初頭に造営された古代寺院で、金堂しか建設されなかった例は非常に少ないことから、どこかに、この時期の塔が眠っているのではないかと考えています。また、近年の調査で、古代の金堂南西側において、大型の掘立柱建物が確認されました。概ね金堂と建物方位が揃うことから、当該期に建設された寺院の施設と推定されます。

### ⑤ 5期 [8世紀後葉]

5期は、従来の変遷案と変更はなく、補修期と考えられます。

### ⑥ 6期 [9世紀前葉～中葉]

6期は、近年の調査でも全く確認されていないため、従来同様、詳細は不明です。

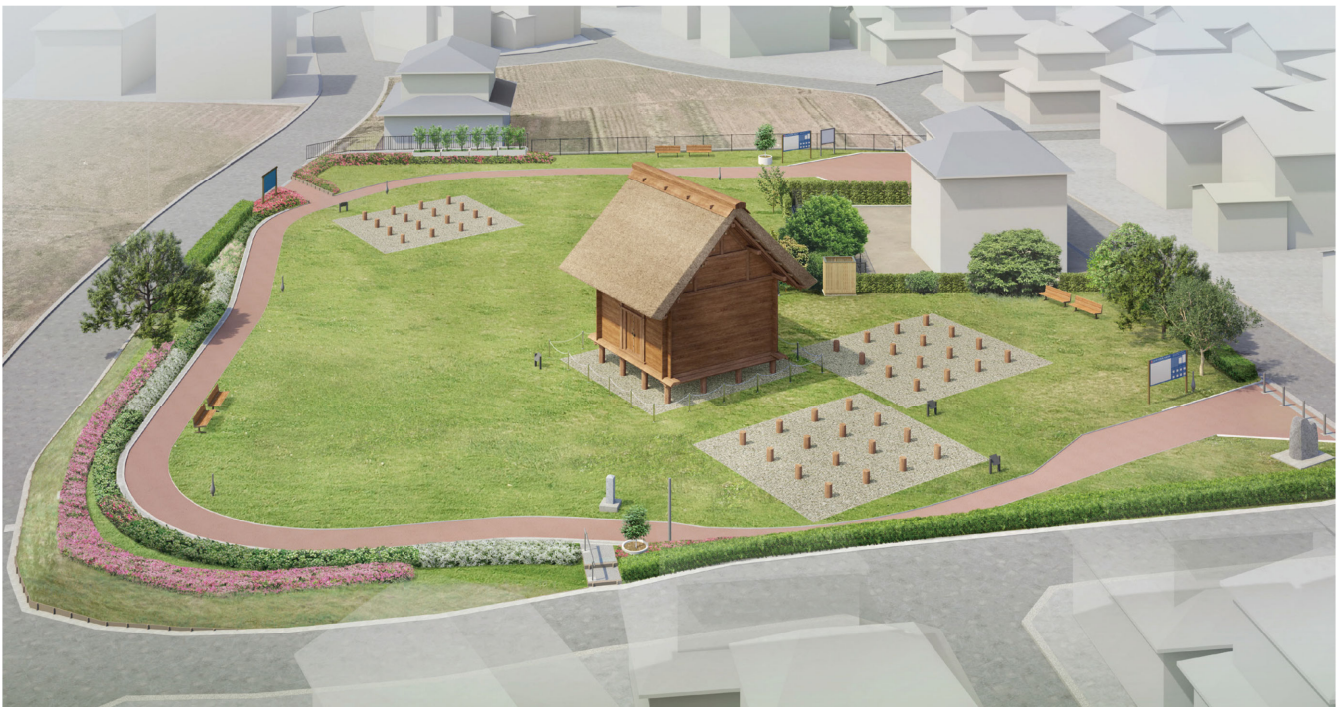
## ⑦ 7期【9世紀後葉～10世紀初頭】

7期は、近年の調査成果により、従来4期と考えられていた塔の造営が、実際はこの時期に行われたことが判明しました。ただし、確認した掘込地業は、古代地方寺院で見られる一般的な三重塔の規模よりも小規模であるとともに、この時期の瓦がほとんど発見されない特徴が見られました。その点からは、(ア)掘込地業は造営したが塔は建築されなかった、(イ)塔は建築されたが瓦葺ではなかった、という2つの案が考えられます。どちらにしても、この時期に塔を造営あるいは再建した理由は、六国史の1つ『にほんさんだいじつろく日本三大実録』や9世紀後葉の寛平4(892)年に菅原道真によって編纂された『るい類聚国史』に載る、天慶2(878)年9月29日に起こったとされる「相模・武蔵地震」によって、古代寺院にも大きな被害が生じた可能性があり、この復興事業の一環である可能性が高いといえます。

## 4. 史跡橘樹官衙遺跡群における史跡整備(第12・13図)

このように、近年の調査などにより、橘樹官衙遺跡群における新たな知見が得られ、その価値もさらに高まってきたと感じています。市教委では、橘樹官衙遺跡群の価値や魅力などを多くの方々に知ってもらい、郷土への愛着をもってもらうため、令和4年度から歴史公園の整備工事を開始しました。今月中には工事が完了する予定です。歴史公園の完成イメージは第12図のとおりですが、今回の整備の目玉は、全国初の飛鳥時代の倉庫を復元したことになります。

この倉庫を復元するにあたっては、現在の日本には、現存する飛鳥時代の倉庫建築がないことから、年代の近い奈良時代・平安時代の倉庫建築や飛鳥時代で現存する建築物の事例を参考にしつつ、発掘調査で得られた様々な情報や橘樹官衙遺跡群が位置する川崎市の気候・自然環境といった観点からの視点も加えて設計しました。検討した結果、復元倉庫は(ア)板校倉造いたあぜくらづくり[写真1・2]、(イ)建物を支える束柱はクリ材つかばしら、(ウ)屋根は茅葺きかやぶき[写



第12図 橘樹官衙遺跡群の歴史公園完成イメージ図





写真1・2 板校倉組立て状況

写真3 茅葺き作業状況

真3] という基本コンセプトのもと、古代と現代の建築技術を融合させるなど、さまざまな工夫を取り入れた設計が完成し、令和5年9月から復元工事が始まりました。

今回の史跡整備は、遺跡群の歴史的価値などを多くの方々に広く知ってもらうための整備だけでなく、もともとあった実なる柿や梅の木を残すとともに、四季折々の花々が咲く植栽や遺跡群のシンボルツリーとして橘樹郡の名前の由来ともいわれる「橘」の木を置くなど、花や植物に興味がある方々にも来てもらえうような工夫をしました。

坂道を上り、日の前の飛鳥時代の倉庫を仰ぎ見ると、古代の人々が抱いたであろう、橘評家や橘樹郡家への畏敬または畏怖の念を感じることができると思います。また合わせて、今から約1,300年以上前に、この地にこのような建物を建設した古代の人々のすごさも体感してもらえたらと思います。



写真4 もうすぐ完成の復元した飛鳥時代の倉庫

## 5. おわりに

市教委では、平成25年度から橘樹官衙遺跡群確認調査事業として継続的に発掘調査を実施しており、今後も遺跡群の全容解明に向けて、引き続き調査を進めていく予定です。新しい成果や情報などをいち早く公開するため、様々な活用事業を実施していく予定ですので、是非参加していただければと思います。また、今年5月には、新たな歴史公園がオープンしますので、こちらにもぜひお越しください。